

按手札についての議論の整理

— 教理史を学ぶ立場から —¹⁾

片 山 寛

1. はじめに

「按手札」をめぐる議論が、日本バプテスト連盟の中で再燃しています。「再燃」というのは、この問題については今から29年前、1981年2月に行われた神学部ミッションデーにおいて、多くのパネラー²⁾によって、すでにかなり包括的に議論されているからです。この時の議論は、その後多くのバプテスト教会で行われるようになった、「按手札諮問会議」抜きの、各個教会主催の「就任按手札」の理論的支柱になったと思われます。つまり、29年前に一度燃え上がった議論においては、バプテスト教会の按手札の（中心的）主体は「牧師集団」ではなく、各個教会であるべきこと、そして按手札の時

1) 以下の論文は、2009年11月2日に行なわれた西南学院大学神学部ミッションデーのシンポジウムにおける私の発題に、多少の書き加えをしたものである。シンポジウムに先立って、日本バプテスト連盟宣教研究所長の濱野道雄氏の按手札に関する講演「按手（札）式を再度考える」があり、シンポジウムでは福岡城西教会の安藤栄雄名誉牧師と私がそれぞれ発題を行った。私の発題は両先生の講演、発題を前提してなされており、お二人への問いかけでもあるので、これだけ単独では理解しづらい部分があるかもしれないが、その点についての説明は特に加えなかった。

2) 1981年2月5、6日、2日間に互って行なわれたこのシンポジウムでは、当時のバプテスト連盟を代表すると思われる9人の論客がパネラーとして登場し、熱い議論を戦わせた。この議論の過程は、当時神学部学生であった小河義伸、原口徹、片山寛が中心となって編集・発行され、その後の按手札をめぐる議論に多大の影響を与えた。『按手札シンポジウム』（宣研ブックレット4）日本バプテスト連盟宣教研究所2007年、186頁以下参照。

期は、できることならば「牧師就任式」の時点であるべきことが主張され確認されたのであります。

これに対して最近の議論の特徴は、按手札に再び「牧師（職）の資格審査」の性格を持たせるべきだ、という要求が、あまり露骨にはありませんが、背後に見えるということだと思います。それは、バプテストの「各個教会主義」が行き過ぎて（?）、教会間の連帯と相互吟味が希薄になったのではないか、そしてその結果として数多くの教会が、牧師の未熟も原因の一つとなって弱体化しているのではないか、という強い危機意識と結びついているのだと思います。そこで「按手札」を見直そうというのですが、そのさい29年前に斥けられた、長老教会的な「牧師集団」の権威を背景とした新任牧師の資格審査は、さすがにバプテストとしては採用しがたいということは了解されています。そこで、「各個教会」がその責任と主体において牧師の吟味を行うこと、そしてそれに地域の牧師たちが協力するという形をとることが理想になります。しかしそもそも考えてみると、各個教会の弱体化という大状況があって、この危機意識が生まれているわけですから、それを強化するために先ず各個教会の確固たる意志がなければならないというのでは、議論が循環に陥っており、どうもうまくいかないのです。

按手札についての議論を循環に陥らせないためには、按手札とは何かを先ず確定しなければなりません。そこでこの小論では、最初に按手札の歴史について簡単に述べます。歴史の中で揺れ動いた要素と、一貫している要素を確認したいのです。その上で、按手札の意味を考えます。按手札の中心的な意味からして、バプテストにおいて按手札は基本的にはどうあるべきかが見えてくるはずです。そしてその上で最後に、「按手札の延期」という事態がありうるとすれば、それはどのような意味においてであるかを考察したいと思います。

2. 按手礼の歴史

(1) 旧約聖書・ユダヤ教

按手礼の始まりを、モーセがヨシユアの上に（両）手を置いたという聖書の記述（民数27：23，申命34：9）から説明すること、あるいはヤコブが両手を交差させてヨセフの子らを祝福したこと（創世記48：14）から説明することは、組織神学的には有効ですが、「按手礼」の歴史的な起源の説明としては問題が残ります。しかしいずれにしても、紀元前4，5世紀の初期ユダヤ教の時代に、すでに後継者の祝福の儀礼として「手を置く」という観念があったということは確認できます。

ユダヤ教の律法学者の任命式（BC. 1，2世紀）では、律法学者たる教師が証人たちの前で弟子に按手することによって、公的な権威を認定し、知恵の賜物を授与するということを儀式化していました。AD. 1世紀後半からはこれに、弟子の名前を呼ぶ、ということが加わりました³⁾。AD. 70年以降は、神殿の消滅によってラビ的ユダヤ教がユダヤ教の中心となって、律法学者の権威が非常に高まったと考えられます。それに対応して、按手もより荘重な形式に移ったのだと考えてよいでしょう。

しかし2世紀の終り以降は、任命権者はサンヘドリン（律法学者たちの評議会）に移り、多くの候補者を集めてナスィが一度に任命することになりました。この形式では、一人一人に按手していたのでは時間がかかりすぎます。そのため、ユダヤ教では「按手」という形式は次第に衰え、5世紀頃には全く消滅しました⁴⁾。消滅しえたということは、言い換えれば、「任命」という事柄と「按手」という形式が必然的に結びついていると考えられてはいなかつた，ということになります。按手によらない任命がありえたし、逆に、任命とは別の目的の按手もありえたということです。そのことは、新約聖書における按手の多数の用例にも現われています。

3) RGG³, Art. Ordinatio, I. Im AT und Judentum (von E. Lohse), J. C. B. Mohr, Tübingen, 1986.

4) *ibid.*

(2) 新約聖書・原始キリスト教

新約聖書には、「手を置く」ということが様々な文脈で語られています。その主なものを挙げると、マルコ10：15（祝福）、マルコ8：23（病気の癒し）、使徒言行録13：3（派遣）、使徒言行録6：6、Iテモテ4：14、IIテモテ1：6（任命）、使徒言行録8：17（聖霊の出来事）などです。これらは、「接手」という行為にこめられた意味内容の多様性を示しています。様々な接手があったと考えてよいのです。

ユダヤ教とキリスト教の関係は、近年、見直されて来ています。これまでは両者を対立的に考え、ユダヤ教の律法主義に対してキリスト教の福音を対置させるのが一般的でしたが、近年では、歴史的研究の結果、むしろ新約時代のキリスト教は、広い意味でのユダヤ教の一派であったということが、主張されています。教会の「接手」についても、上に述べた当時のユダヤ教の「接手」から受け継いだものだという説が有力です⁵⁾。しかし、はっきりと教会の教師の任命に、長老や使徒による「接手」が行われたと書いてあるのは、2世紀（使徒教父時代以後）のものだとされる牧会書簡だけです。

E・シュヴァイツァー⁶⁾によれば、新約聖書の中では、牧会書簡を例外として、「教職」とよぶべき特別な教会内の身分はまだ始まっていませんでした。それに従えば、使徒言行録6章などの「接手」も、(一時的な)「委任」ということではあっても、固定的な「任職」と理解するのは、歴史的には行き過ぎであると思われます。つまり、これは後に論じるのですが、「接手礼」の意味として聖別、吟味、任命、祝福などが挙げられてきましたが、新約聖書に従えば、(聖職者に恒久的な資格を与えるという意味での)吟味や任命は、少なくとも接手礼の中心的な意味ではなかったということなのです。

(3) ローマ・カトリック教会

使徒教父の時代以降、教職位階制は形式を整えつつ一貫して強化されたと

5) *ibid.*, II. Im NT (von E. Lohse).

6) E・シュヴァイツァー『新約聖書における教会像』新教出版社1968年、特に322頁以下参照。cf. E. Schweizer, *Church Order in the New Testament*, transl. by Frank Clarke, 1961, pp.206-210.

いうことができます。監督（司教）、長老（司祭）、執事（助祭）という、すでに名称だけは新約聖書に出て来る「三職」を中心にして、教職の秩序（ordo）はタテに広がってゆきました。「按手札」という言葉は、通常、ordination の訳語だと考えられていますが、この ordinatio という言葉そのものが、この教職位階制 hierarchia の秩序を前提としているのです。

教職の位は、細かく分けていくといくらでも多くの位に分けることが可能です。たとえば中世の教皇庁に各地の司教、司祭、修道院長、修道士などが100人集まったとすれば、その100人は完全に縦一列に並べることができたはずで、それは、それだけ多くの教職の位階があったということではありません。中世社会というのはそのような席次の必要になる社会だったということです。つまり、たとえば同じ司教どうしであっても、その治める地域の「格」によって、自ずから順位が決まっていたのです。

しかし制度として言えば、基本的には、中世盛期の西方教会の、教皇制が完成した時代の位階制は、おおよそ以下のような位階 ordo を持っていました。この中で、下位の七つの位階を七聖品（品級）septem ordines sacri（司教を入れて八聖品とすることもあります）と呼んでおり、これらが叙階 ordinatio の対象です。司教以上の上位聖職者は聖品から言えばすべて「司教」と等しいとされます。司教職はすべての位階を完成するものだとされるのです。司教以上の上位聖職は、行政的・裁判的権力（裁治権）を与える任職である jurisdictio の対象となります。

①教職位階制

10) Papa 教皇

(Cardinalis 枢機卿)

9) Archiepiscopus 大司教

8) Episcopus 司教（＝監督）

7) Presbyter, Sacerdos 司祭（＝長老）、Presbyteratus 司祭職

6) Diaconus 助祭（＝執事）、Diaconatus 助祭職

5) Subdiaconus 副助祭、Subdiaconatus 副助祭職

- 4) Acolythus 待者, 待祭, Acolythatus 待祭職
- 3) Exorcista 悪魔払い, 祓魔師, Exorcitatus 祓魔職
- 2) Lector 朗読者, 読師, Lectoratus 読師職
- 1) Ostiarius 寺男, 門番, 守門, Ostiarius 守門職

②礼典(秘跡)の問題

按手礼が「礼典」執行権の授与と結びつくのは、司祭の叙階が「秘跡 sacramenta」を執行する権能を与えるものであったことから来ています。

中世には、司教の任命は「叙任」ordinatioではなく「裁判権授与」jurisdictioあるいは「聖別」consecratioと呼ばれたのですが、それは秘跡、とくに教会の秘跡の中心である洗礼や聖晩餐の執行について、司教は司祭と同じ権能を有するのであって、叙階によってこの点で何かが付け加わるのではないことからきています。トマス・アクィナスによれば、司教のみの権能に属するのは、より周延的な堅信礼および叙階の秘跡に限られるのです⁷⁾。

とはいえ、叙階は七つ(あるいは八つ)の聖品の叙任すべてに共通する名称であって、司祭の叙任だけがそう呼ばれるものではありません。按手(頭に手を置く)という形式も、司教、司祭、助祭の三つの位階の叙任に際してなされており、また司祭が信徒に洗礼や堅信礼を行う場合にもなされるのであって、司祭の叙任に限ったことではありませんでした。ただし、司教による司祭の叙任は、慣例的に秘跡の執行や、個別教会の司牧を委ねられる資格の認定と理解されましたので、非常に大きな意味を持っていたことは事実です。

以上述べたことは、中世カトリック教会の教職についてであって、現代のカトリック教会では、寺男は事実上廃止され、待者や朗読者などは教職ではなく信徒が勤めることになっているなど、大幅に変わっています。しかしそれについてここで詳しく述べる余裕はありません。

7) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, III, 65, 3, arg. 2; 66, 3, ad 3; 72, 11.

(4) 宗教改革の教会

宗教改革の教会では、教職は監督 *Bischof*、牧師 *Pfarrer*、副牧師 *Vikar* の三つだけに整理されました。これら三職は新約聖書にも見出されるからです（監督、長老、執事）。ここでの教職は、信徒と区別された別社会（身分）としての教職位階制を意味するとは理解されていません。牧師は信徒の一人である（万人祭司 *Priestertum aller Gläubigen*）、という明確な主張が宗教改革の教会にはあるからです。とはいえ、教職制はルター派においても改革派においても、場所と時代による偏差が大きいので、ここで一概に述べることには躊躇せざるをえません。

領邦教会の監督 *Bischof* の制度は現在もありますが、これは教職の段階ではなく、行政上の職務だと理解されており、任期が終れば牧師に戻ります。その意味では牧師と副牧師のみが教職の段階だといえることができます。しかしこれを二重教職制だと考える人は、現代のドイツのEKD（福音主義教会）では多くありません。というのは、副牧師 *Vikar* は大学神学部卒業後の数年間のインターンのようなもので、そこでの実習とその後の公的な試験を経て、初めて正式の教職につく資格を得る、という理解が一般的だからです。医師や弁護士との制度と同じです。副牧師は正規の牧師ではなく、その見習いだというわけです。また牧師と副牧師の職務上の差は、最近はかなり埋められており、副牧師でも牧師の許可の下に、説教はもちろん洗礼式や聖餐式も執行することが、現代では一般化しています。

正式に牧師になるときに行われるのが、按手礼です。これは、最初に赴任する教会で行われる場合と、公的試験合格者を集めて卒業式のような仕方で行われる場合と、両方があります。また近年では、ラインラント州教会のように、牧師の按手礼以外に、信徒説教者や青少年担当主事にも按手礼をしている先進的な教会もあります。

(5) 欧米のバプテスト教会

①ヨーロッパ（イギリス、ドイツ）のバプテスト教会

斎藤剛毅師の報告によれば、英国のバプテスト教会には、

- a. 按手礼諮問会議は存在しません。
- b. 按手礼は牧師の就任式と同じであり、通常、神学校を卒業して最初に赴任する教会で、近隣の教会代表の出席を得て行われています。
- c. 按手礼と礼典執行とは結び付けて考えられていません。

斎藤師はこの結論として、日本でも最初の牧師就任式と同時に按手礼を行うべきだと主張しています。ドイツのバプテスト教会も以上の点では同じです。二重教職制をとらず、しかも（牧師団や領邦教会ではなく）各個教会が牧師を任命する主体であると考える以上は、牧師就任式での按手が確かに最も自然であると考えられます。

②アメリカのバプテスト教会

L・K・シート師によると、アメリカのバプテスト教会では、英国と同じ「最初の赴任地での牧師就任にさいしての按手礼」の他に、相当多く、母教会で按手礼をしてから神学校あるいは他教会の牧師職に送り出す、という方式がとられている場合が多いといえます。これは、アメリカでよくある「信徒説教者」の制度と関連があり、信徒説教者として何年間か働いた人が牧師に献身する決意を固めた場合には、母教会で按手をして牧師にしてから、神学校や任地に送り出すことが多いからです。この場合、当然ながら、按手礼と礼典執行権の委託は互いに関係がないこととなります。

結局、欧米のバプテスト教会では、

- a. 按手礼は牧師を最初に任命する式の形式として理解されており、
- b. 礼典執行の委託は、これと必ずしも同時ではなく、
- c. 礼典執行は牧師個人の資格ではなく、教会のわざであることが確認されています。

3. 按手礼の意味

以上、按手礼の歴史について簡単に振り返りましたが、結論として言えることは第一に、教職の任命式としての按手礼は聖書の時代には存在せず、2

世紀以降に登場した、ということです。そして第二に、按手札の形態（按手札の主体、それによって任命される教職、その教職に付随する職務内容）はその時代の社会と教会の形態に応じて変化してきたということです。またたしかに教職の任命に「按手」という形式は用いられてきましたが、それ以外にも様々な場面で「按手」は用いられたということです。つまり、牧師の就任式と「按手」という形式の間には「必然的」だと言える関係はなく、ただそれが「ふさわしい」という理由からなされてきたのです。

ここで改めて考えたいのは、按手札の中心的な意味についてです。

つまり按手札の問題は、按手札とは本質的かつ根本的に何であるのか、ということに集中して考えるべきだということです。午前中の濱野道雄先生のお話も、さきほどの安藤栄雄先生のお話も、按手札をめぐる様々な議論とその歴史を見事にまとめてくださったのですが、按手札の中心にあることがら、つまりギリギリのところ按手札は何によって成立しているのか、という中心の事柄が少しぼやけていて、そこから付随的に出てくる様々な問題が、多少総花的に並べられていて、その点が私には少し不満でした。

たとえば濱野先生は、按手札の基本的な意味として、①吟味、②委託、③祝福、④公開、の四つを挙げてくださっています。これはとてもすぐれた、バランスのよい分類なのですが、こうした分類は、それこそ木村文太郎先生の論文（祝福、委託、聖別、教会の働きの想起）以来続いているわけです。しかしここでは、これら4つの中心にあるのは何か、ということは語られませんでした。その結果、この4項目をすべてクリアーしてから按手札をすべきだということになり、1年以上3年以内という、算定基準の少し怪しげな数字が出て来ることになりました。

あるいは安藤先生は、ある意味でとても大胆に、「バプテストの統一性・一致を追求してゆくべき時期」だという時代判断に立って、暫定的な提案をしておられます。それは、新しく牧師を立てるに際して、教会が教会であることの棚おろしをする機会として按手札をとらえておられるのです。この時代判断は、私たちが傾聴すべき大切なものだと思います。ただそれは、濱野先生の挙げられたこれら4つの意味の中で言えば、①吟味、ということの中

心にして述べられていると思われるのです。それは実践的で、かつ今日的な状況を見据えた提案であります。それではなぜ接手礼の中心は「吟味」であるのか、ということについては語られません。接手礼とは本質的に、牧師や教会の吟味なのでしょうか。私はそうではないと思うのです。

4. 接手礼の中心は祝福

それでは、接手礼の中心とは何なのでしょう。「接手」つまり手を置くということの中心は、新約聖書以来、神さまの祝福を祈り求めることでした。濱野先生が引用しておられましたが、H・G・パールマンによれば、接手礼を成立せしめているものは祈りに他なりません。「接手礼は、本質的に言って祈り」⁸⁾なのです。ここでは、牧師の頭に手を置くという、牧師の接手礼だけに話を絞らせていただきますが、新しく牧師になる人の上に、神さまが祝福を与えてくださるように祈るということは、とりもなおさず、この一人の人間を、本当の意味で牧師にしてくださいるのは神さまなのだ、ということの確認でもあります。

一人の人が牧師になるということには様々な要素があります。本人の信仰や召命感、神学校での厳しい学び、教会による吟味と選び、教会自身の自己吟味、それらを経て一人の牧師が誕生するわけですが、しかし最終的に人を牧師に任命なさるのは神さまである。神さまが選んでくださるということがなければ、人を牧者にすることはできないのです。すなわち、どんなに人間的・教育的・教會的条件が揃っていても、神さまがこの人を祝福してくださらなければ、本当の意味で牧師にはなれないのです。そのことを確認し、神さまの祝福を求めて祈る、ということが接手礼の中心であります。

この中心からして、接手礼の他の意味もまた説明されます。接手礼には副次的に確かに①「吟味」ということが含まれると思います。「吟味」が中心ではないのですが、「吟味」も含まれるのです。ただしその「吟味」とは、

8) H・G・パールマン『現代教義学総説』新教出版社 2008 年、470 頁。cf. Horst Georg Pöhlmann, *Abriß der Dogmatik*, Gütersloher Verlagshaus, 2002, S.346

各教会や地域の牧師集団が新任の牧師を吟味するということでもありましょうが、もっと本質的には、当の自分たちがまさに神さまの教会であり、まさに神さまに仕える牧師たちであることが吟味されるということではなければならないはず。ちょうど主の晩餐を受けるときに、それを受ける一人一人が、自分が祝福に値するかどうかを吟味すべきである（I Cor. 11, 27-28）ように、握手礼においてそこに集う一人一人とその教会が吟味されるのです。牧師に手を置くということは、その牧師を通して神さまの言葉を聴くということの承認でもあるのですから、握手礼において、短くても、握手された牧師の説教あるいは祈りに耳を傾ける機会を設けた方がよいのですが、多くの場合それは行われておりません。「祝祷」は時々目にすることがあります。これはよい習慣だと思いますが、握手礼を「祝祷」をする権限の付与のように考える誤解は、改めなければなりません。握手礼は歴史上、結婚式と比較されることがあるのですが——それは、司祭の独身制度との関連で、握手礼が司祭にとっての結婚式だと理解されたことからきています——（聖職者独身制はともかくとして）内容的に深いところで対応関係を意識した方がよいように思います。結婚式もまた本質的に「祈り」であり、同時にそこに集う会衆すべてが自分にとっての結婚の意味を吟味する機会でもあるからです。

②「委託」というのは、牧師のさまざまな仕事（説教、牧会、礼典）をその人にお任せするということなのですが、その「委託する」つまり「任せる」あるいは「委ねる」ということの意味を、もっと深く確認する必要があります。神さまが一人の人を選んだ、ということは、その人が独占的に祝福を受けて支配者となるということではなくて、その人を通じて多くの人々に神さまの選びと祝福が広がってゆくということ（「祝福の源となる」Gen. 12, 2b こと）であります。ですから「委託」もまた祝福から出てくる、祝福のひとつの形なのです。

④「公開」ということもまた、根本的には神さまの祝福の広がり、分かち合いとして理解すべきであります。裁判の公開とか、裁判員制度のようなものとは違います。一人の牧師が選任され握手されるということは、一つの教

会がある意味でそこで生まれ変わったものとして誕生したということでもあり、それを通じて多くの教会が神さまの祝福を受けたということでもあります。

ですから、以上述べたことがらの根本から言って、按手をして祈るべきなのは、牧師就任のそのときである、ということになります。もし人間的・教会的な吟味が必要なら、それはその前に済ませておくべきだ、ということにもなります。すでに按手礼抜きで牧師に任命してしまってから、数年後にもう一度資格審査のようなことをして按手礼をするというのは、私には納得がいきません。牧師になるときに神さまの祝福を祈るのは当然のことであって、祝福の部分だけ先送りしてというのは、筋道が通りません。

5. 牧師としての適性の吟味

神学校を出たばかりの卒業生は、いろんな意味で、つまり職業的にも学問的にも人間的にも未熟であることは否定できません。牧師としての適性の吟味ということも、どこかでするべきだという議論も成り立ちます。それを制度化した方がよいということが教会会議で決まるならば、私はそれに反対するものではありません。牧師に向かない人が牧師を続けることは、当の教会にとっても苦痛ですし、牧師本人にとっても痛みが大きいので、何らかの救済策を用意すべきだということはあるだろうと思います。そのような制度の創設は、人間的には多くの痛みを伴うものですが、人の世には必要なものだと思います。それは先ほどの「結婚式」とのアナロジーで言いますと、離婚調停のようなものです。

しかしその議論と按手礼を結びつけるのには、私は反対です。それは監督主義的、長老主義的な匂いがして、バプテスト的ではないからです。また牧師の中に、按手礼を受けていない牧師と受けた牧師という一種の身分階層を——長老派にさえないような形で——作ることもなるからです。そして根本的には、按手礼は神さまの祝福を祈ることだという、按手礼の中心的な意味に合わないからです。

6. おわりに

すでに述べたように、「按手」という形式と「牧師就任」との間に必然的な関係はありません。ここで論じたのはただ、新しく立てられた牧師に神さまの祝福を祈るという、「按手礼」の中心的な意味からして、牧師就任式でそれが行われるのが神学的に最もふさわしいということです。仮にもし、それよりもっと緊急性・必要性の高い理由が存在するならば、牧師就任式と按手礼を分離して、濱野先生が言われたように、「1年以上3年以内」按手礼を延期するということも、ありえないことではないでしょう。ただ私が懸念するのは、その「延期」が人間的な恣意によって左右されるならば、その隙間に人間による教会支配の構造が生まれてくる可能性があるということです。長老制であれ監督制であれ、教会支配の構造は、聖書時代以降の歴史の中でこの隙間に作られたものであります。ただし、長老制や監督制を自覚的に採用した教会では、その欠点ももちろん意識しており、恣意的支配に陥らないような工夫も、歴史の中で積みあげられてきました。重厚壮大な神学も、その工夫のひとつかもしれないと思います。

バプテスト教会は、重たい支配構造を嫌い、そこから身軽になった教会です。その身軽さを生かして時代の変化に対応しつつ、しかし神さまへの信仰という原則を守りつづけるためにはどうすればよいのか。それが私たちの前にある問いです。その問いは、これからも私たちがバプテストであるかぎり、私たちの前にありつづけることでしょう⁹⁾。

9) シンポジウムの中で、会場におられた藤田英彦先生から、「バプテストの牧師は身分ではなく職分である」(金子敬『牧師の働き』日本バプテスト連盟・宣研ブックレット、2009年、21頁)ということはどう考えるのか、という質問がありました。内容と深く関わる質問ですので、私の応答を少し整理してここに述べます。片山は身分制度の擁護者だ、という誤解が広がっているようにも思われますので。

私の研究してきた中世ヨーロッパにおいて、身分とは職業のことでした。つまり、古代的な血族身分制度に代って(あるいはそれに加えて)、中世には職業身分制度が社会の骨格を占めるようになったのです。近代になってそれに代って登場したのは、学歴身分制度だと思えます。

ですから、「牧師は身分ではなく職分だ」という言葉は、ちょっと聞くとわかりやすく、「民主的」「万人祭司的」であるように聞こえますが、実を言うと非常に曖昧で、何を言っているのかよくわからないのです。それは単に、中世とは違って、今では一般的に(職業組合制の名残を持つ医師、弁護士などを除いて)職業が人の一生を覆うものではなくなったというだけであります。それは一面では「自由」でよいことなのでしょうが、現代ではそのようにして、生涯の仕事から切り離され、自分のアイデンティティを奪われ、「ただの老人」にされてしまった高齢者の方々がいたるところにいます。

私が「牧師はある意味で身分であるような最後の職業ではないか」と申し上げたのは、そのような意味においてです。牧師となった人間は、教会の現実的な職を解かれても、その後も「かつて牧師であった人」の生き方というものを持っているし、またそれを持っているべきではないでしょうか。そして、ライフスタイルのあるところに「身分」はあるのだと、私は言いたかったのです。身分(status)とは元来、「立ち方」「立場」のことだからです。